暴力少女～ファイティングガール～

美月　花音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
暴力少女～ファイティングガール～

【Ｎコード】
Ｎ０６８１Ｆ

【作者名】
美月　花音

【あらすじ】
いじめられっ子の主人公が、五年進級で変わろうとする！！変わった彼女は一体どうなる！？そして彼女はいじめから脱出できるのか！？

プロローグ～彼女は変わる～（前書き）

この小説はいじめに関する部分があります。
それを了承してお読みください。

プロローグ～彼女は変わる～

私は昔から、いじめられてた。幼稚園から、ずっと。

1年のころに、消しゴムを折られ、無視され、ほかの人に席に座られて、自分が座れなかった。2年のころは、いじめの波も収まり、友だちもできた。

しかし、3年になって、またいじめられた。今度は持ち物をトイレに投げられ、教科書を破られ、二年のころにできた友達にまで無視された。無視しない友達もいたが。

でも、私は耐えた。耐え抜いた。おかげでいままでのいじめの十分の一がへった。あとはかわらなかったが。

せっかくできた友達に無視され、学校に行けばいじめられ、家に帰れば親に無視され、挙句の果てに家に押しかけていじめられる。

ーもうこんなの、いやだ。私は変わる、変わるんだーーー。

私がそう思ったのは、5年生になった直後のことであった。

第一話・決意

私は、上月愛華（こうづきまなか）。小五のいじめられっこ。

またショーゴにいじめられると思うと学校には行きたくない。

でも、絵美奈と会えるから我慢していくんだ。

絵美奈―清水絵美奈（しみずえみな）は私の大親友。二年のときにできた友達で、唯一私を無視しなかった友達。違うクラスだから、休み時間ぐらいしか会えないけど・・・。

「あ、来たぜ。」「上月よ。頭いいふりしたパシリ。」「またショーゴがパシルな。」

私が来るといつもこう。今日も気にしない。気にしていたらきりがないから。

私だってこんな事言われたくはない。でも私はやめさせることができるほど強くもない。

「パシリ優等生だぜ、ショーゴ専属パシリ。」

私はパシリじゃない！！そう叫びたかった。でも今の私にはそんなこと言う権利はない。

「ガラガラッ！！」ドアが開く。この乱暴な開け方はきっと・・・

「よう、パシリ優等生。今日もウザイ顔で本読んでんなあ」

七打彰吾（ななだしょうご）。私をいじめるいじめっ子。世界で一番消えてほしい男。

こんなのが生きているだけで許せない。私はいつもそう思う。
いつもはこいつから目をそらすけど、きょうは彰吾の目を真っ直ぐに見てやった。
「何だよ、その目は。俺に喧嘩売ってんのか。なら、お望みどおり新学期早々ボロボロにしてやるよ」
「え、きゃあああ！！」
なにこれ、今までと違ういじめのやり方。いつもよりも彰吾が怖い。
「・・・やめっ、やめて、いやあ、いやあああああ！！！！！！！」

数分後。
私は三年のときのいじめと同じことになっていた。
新しい教科書は破られもうすでにに読めない状態に。さらに油性のペンですべてのページに落書きがしてあって、解読不能になってしまった。
ランドセルはボール扱いにされてボロボロに。
私もバケツの水を三杯かけられてビショビショ。
誰も止めない。助けようといない。みんな見てる。笑いながら見ている。

「水も滴るいい女ってか？笑えるぜ」彰吾が言う言葉も耳に入らなかった。

許せない。何で私がいじめられなきゃいけないの？何で私だけ？何で？何でよ・・・？

放課後。彼女―愛華の思いは変わっていた。

許せない！あんな奴野放しにしておくのがいけないのよ！

あんな奴いなくなれば―そうすれば私だっていじめから脱出できる！

私だって―私だって絵美奈と一緒に遊んだり笑ったりできる！

許さない。あんな奴、この世から全滅させてやる！私が、私が消してやる！

それまでは、絶対に許さない。

絶対に――――――――！！！！！！！！！！

眼鏡を掛けた女の子の目は、優しい目から、冷酷（クール）な目に変わってい

た。

女の子は、冷酷（クール）な微笑みを浮かべ、教室を去った。

その微笑みは、氷のように冷たかった。

第一話・決意（後書き）

次回、愛華は何をするのでしょうか！？

次回、お楽しみに！

第二話・変わる愛華

あたしは、上月愛華（こうづきまなか）。いじめられている。

でも今日からは違う。あたしは変わる。変わるんだ。

もう誰にもパシリなんて言わせないために。ごく普通の日常を送るために。

そして何より、もういじめなんて、このクラスから消すために、あたしは変わる。

もうあたしは、いじめられっこじゃない！！

あたしがひどいいじめにあったその二日後。教室に入ったあたしを見て、クラスメイトは驚きを隠せなかった。それもそのはず。だって、一昨日のあたしとは、まったく違っていたのだから。

茶髪に染まった髪。

少し大人目のメイクをした顔。

服装も落ち着いたものから露出が多いものに変わっていた。

そして何より・・・・・。

「お前・・・・・眼鏡は・・・・・？」

そうなのだ。一昨日までかけていた眼鏡は、顔から消えていた。私は眼鏡をやめ、コンタクトにしたのだった。

もちろん、医者に許可は取っていない。

「お、どろいた・・・・まさかあのパシリゆ・・」「パシリ優等生じゃねえ！！！！！」

バンッッッッ！！！！！！あたしが黒板に筆箱を投げつけた。その音が教室中に響き、みんなは言葉を失った。いや、出せなかったといったほうがいいかもしれない。あたしはもう一度、低い声で重々しく言った。

「あたしは　もうパシリ優等生じゃねえ。」

「気取ってんじゃねえよ」
その声がした方向―後ろの扉のほうに目を向けた。そこには――彰吾がいた。

「お前は、いつまでもパシリって決まってんだよ、俺専属のな。」

あたしは、彰吾の目を見た。鋭かった。ほんの少しだけ、怖かった。でも、言ってやった。

「ふざけんな。てめぇのパシリなんかやらされてたまるかってんだよ。もうあたしは変わったんだ。」

そこまでいって、彰吾をまっすぐ、鋭い目で見た。そしてもう一度、低い声でいった。

「もう誰にも、パシリなんて言わせはしない！！」

「はん」
彰吾が言った。鼻で笑った、その一言に対する怒りをこめて、あたしは言った。
「馬鹿にすんじゃねえよ。二日で変われるかって思ってるだろ？変われんだよ！気持ちと努力はあればな」
「お前が変われるわけねえだろ？このパシリが！馬鹿が！いじめられて強がり言うしか能がないアメーバさんよう？」
「なんだとぉ・・・・・？」
あたしは怒りを――ＭＡＸの怒りを込めて、あたしは怒鳴った！
「ふざけんな！！いったろ？あたしは変わったんだ！！なんならどっかで、いじめてもらってもいいんだぜ？いじめることしか能がない蛇さんよ？」
ついでに少々の皮肉も入れまして、いった。彰吾はちょっとムカついたみたいだったけど、無視。
「・・・・いいぜ、試そうじゃねえか」
「ほう、戦いを受けるか」
「ただし、だ」
彰吾はちょっとだけ目を尖らせて、言った。
「戦う――確かめるのは、俺の部下たちだ。お前がどんなに弱いか、教えてやるぜ」

ふうん、彰吾はそーゆー手できたのか。なら、そいつらをもてあそぶのも面白いかもね？

「受けてたとうじゃねえか。こっちも、あたしがどんなに変わったか、教えてやるよ」

「上等じゃねえか」

「そっちこそ」

あたしらはしばらく睨み合った。そして彰吾が、こんなことを言った。

「決行は明日。放課後にやる。逃げんなよ」

「そっちこそ。ところで」

あたしは冷酷（クール）な微笑みをうかべ、聞いた。

「本当に、いいのね？」

「ああ。それが何か？」

「なんでもないわ。じゃ、また明日。」

あたしは教室を立ち去った。

彰吾も変だと思ってたけど、これでいい。

きっと、とめても無駄だから。

決着は、明日。

彼女が彼に聞いた言葉には、ワケがあった。

それを聞いたら、貴方は「きっと自分でこんな事いえる」とお思いだろう。

しかし、彼女にはそれができなかった。いや、する必要がなかったのだ。

彼女は表情で、説明していたのだから。

そして、彼はそれを無駄にしたのだから。

「きっと後悔するわよ」という、彼女からの、最後の忠告を。

第三話・戦闘&過去

あたしは上月愛華(こうづきまなか)。
今から彰吾と――正確には彰吾の部下と――――戦うことになっている。
彰吾はあたしを見下している。だから、あたしはこの戦いであたしは変わったと認めさせてやる！
あ、きたみたいだ。あれが彰吾の部下・・・・ええっ！！！

「あんたたち、何でそんなもん持ってんの！？」

そう。彰吾の部下たち――――覆面、サングラス、バンダナ巻き、ロンゲ、ガングロ野郎、キャップかぶりの計六人の男たち、BAK(バック)RUZ(ルズ)は、なんと！
鉄パイプ、椅子、ジャックナイフなど、暴力団が通りすがりの男性をカツアゲする道具に等しい道具を持っていたのだ！！！

なんて卑怯な輩！！

「これはなぁ、師匠――――彰吾さんが持ってけ、って出してくれたんだよ」
「これでアンタをボコボコにしろってなぁ！！」

ふうん、ほんとーに卑怯なのは彰吾ね。

「じゃ、はじめますかっ」

まあ、こんな奴が道具を使うのは慣れてないはず・・・

「おらぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！！」

ってすんごい慣れてるしーーー！！ま、慣れてるモンは仕方ないっと。

「とりゃっ！」

「うぎゃっ！！！」

「うりゃああ！！！」

あたしの回し蹴りで覆面の男が吹っ飛ぶ。弱くねこいつ？

「おりゃっ、と」

「・・・・！？　ぎゃああ・・・・・」

こんどはかかと落とし炸裂。バンダナまきが崩れ落ちる。

「うらあああぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！」

「ほざけぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！！！！！！」

今度は前後同時にロンゲとガングロ野郎が鉄パイプとジャックナイフ片手に襲い掛かってきた。

どっちをよけても危ないわね・・・・

そう考えたあたしは、二人が何十センチぐらいかに来たところで、体を右に引いた。

すると、男たちはあたしの前後にいて、同時に襲い掛かったから、真ん中のあたしが消えると、男たちが衝突することになる。

「あがぁぁぁ？」

「いたぁぁぁ・・・・・？」

同時に鉄パイプとジャックナイフきり付けを食らった二人は倒れた。
自業自得ね。

そう思ったあたしの背後に、今度はサングラスの男！

「おらおら、油断してると危ないぜ、とりゃ！！」

「え・・・？うそ！えいやっっっっ！！！！」

「ぐはぁぁぁ？」

間一髪、あたしのパンチが相手のみぞおちに。当然相手は倒れる。
ふう、危なかった。

「なかなかやるな。だが、俺はそうは行かない・・・・」

「よいやっ」

右足引いて、

「さあっ！！！」

回し蹴りー！

「ぐほぉぉぉぉ・・・・・？！」

無駄口たたくぐらいなら攻撃しなさいよ、まったく。

でも、これで全員倒した。あたしは言った。

「あんたたち、人間（ヒト）には表と裏があるって知ってる？」

「表と・・・・・裏？」

「そう。」

あたしは、冷酷（クール）な微笑みを浮かべていった。

「表では友達ぶってても、裏ではその人の悪口を言う。そんな人がこの世界にはいっぱいいる。でも、表しかない、とってもいい人だっている。それがあたしだった。」

あたしは昔を思い出す。幼稚園、小一、小三・・・といじめられてたころを。

「表しかない人はいじめられる。みんなと違うから。それだけでいじめられる。脱出するには裏を知るしかない。しかし、あたしは裏を知りすぎて、またいじめられた。」

そういえば、裏を知らないあたしに裏を教えてくれたのは、絵美奈だったっけ・・・・？。

「そのうちに、あたしは裏の世界から出られなくなった。表でいじめられるあたしにとって、裏しか居場所がなかったんだ。そうしてあたしは・・・・」

そこでいったん言葉を切った。あたしを裏の世界に追い込んだ、彰吾が憎いと思ったからだろう。

「裏の世界に追い込んだ彰吾を、恨むようになった。だからあたしは、変わったの。」

きっと、あたしが変わらなきゃいけないことは、決まってたんだね。その思いを込めて、彰吾への怒りと憎しみ、恨みを入れて、あたしは冷たく言い放った。

「復讐を遂げるファインティングガール――――暴力少女に。」

あたしの目もいつしか、復讐を誓う冷たい目に変わっていた。

「あっそうそう、ＢＡＫＫＵＲＵＺＵの皆さん。」

あたしは倒れている男らに優しく言った。

「もう、彰吾の部下なんて、止めたほうがいい。そして、もっといい人を慕うのよ。そのほうが、あんたたちのため。」

「「はい！！！」」

なんかやけに元気なのは、どうしてだろう？

「それではいつかまた」

あたしは後ろを向いて、振り返った。

「貴方たちが誰かに暴力を振るったときに会いましょう？」

ゾクリ。彼女の顔を見た男たちに、寒気が走った。それもそのはず。

彼女の顔は、もう笑ってはいなかったのだから。

その顔は、復讐を遂げようとする鬼のように、恐ろしかったのだから。

第三話・戦闘&過去（後書き）

書いてから気づいたんですけど、ＢＡＫＫＵＲＵＺＵって、いったい何歳なんでしょうか？

小五の部下で、鉄パイプやジャックナイフ持ってるから、きっと成人男性ですかね？

彰吾、恐ろしや～！！

第四話・私は独りぼっち・前編

こんにちは！！上月愛華（こうづきまなか）です♪

今日は、久しぶりに親友・清水絵美奈と遊ぶ日なので、嬉しいですっ！！！！！

というわけで、今日は、ほとんど女の子口調で失礼します！！！

らんらんらら～ん♪♪♪うれし～な～♪♪♪♪

あ！絵美奈が来たみたいです！

「絵美奈ぁぁぁぁぁ～～～～～～★☆★☆★☆」

「あ、やっほー、愛華・・・」

元気がないと思うのは、私だけでしょうか？

「絵美奈☆久しぶりだねっ！！！！！」

「あ、うん、久しぶり・・・・・」

少し気になった私は、聞いてみた。

「絵美奈、どうしたの？」

「あ、ううん、何でもない・・」

絵美奈が、怯えているように見えたのも、気のせい――――？

私は絵美奈がなぜ怯えていたのか、後で知ることになる――――――

「ねえ、絵美奈？本当に何もないの？」

「ないってば！！ホントにないの！！！」

「ほんとー？？？」

「ほんと！もぅ、しつこいなぁ・・・・・・」

「ごめん・・・・・・・」

私が絵美奈を怒らせたのは、初めてのことだった。
いつもは絵美奈、こんなことじゃ怒んないのにね――――
どうしちゃったんだろ、絵美奈――――――？？？

絵美奈はなぜ怒っていたのか？
それは、彼女がある噂を耳にしてしまったからだ。
人一倍優しくて、暴力を嫌う彼女が、この噂を耳にしてしまったのだ。
彼女もこの噂を耳にした時、信じられなかったに違いない。
なぜか？彼女の親友――愛華がこんなことをしているなんて、夢にも思わなかったからだ。
「上月愛華は毎日男たち数人を呼びだして、殴る蹴るの暴行をしている」
という、間違った噂を。

第四話・私は独りぼっち・前編（後書き）

初めての前後編ですっ！！

ついでにちょっと短めです（笑）

第五話・私は独りぼっち・後編（前書き）

前回の続きです！

第五話・私は独りぼっち・後編

こんにちは・・・・・。

ちょっと元気がない上月愛華です。

実は、親友が元気がないので、それに釣られてあたしも元気がないのです。

どうしたのでしょうか？

「・・・・ねえ、絵美奈？なんかあるんじゃないの？親友なんだから、話してよ」

「ないったら！しつこいなあ！」

「ねえ！あたしは心配して言ってんだよ！あたしの気持ちも分かってよ・・・・・・・！！！」

あたしが言った瞬間、絵美奈が・・・・・・キレたように見えた。

「・・・・・・・・・・ない」

「え？」

「愛華なんかにそんなこと言われたくない！！！！愛華だってあたしに言わなきゃいけないことあるでしょう？」

「あたし？なにも・・・・・隠して・・・・・・ない・・・・・よ？」

「隠してんじゃん！！！知ってるんだよ？愛華が毎日誰かに暴力振るってんの！！！」

それを聞いたあたしは、一瞬信じられなかった。

あたしはいじめるやつに正当防衛している。

なのにそんなふうに――――一方的にやったみたいにいわれているなんて、信じられなかった。

「絵美奈・・・・・・・・それ、どういうこと？」

「知ってるでしょ？あたしが人一倍暴力とかいじめが嫌いなんだって！
知っててそんなことやってんの？信じらんない！！！！」

「・・・・・・・・・・・・ねえ、絵美奈？」

「なによ？」

「人一倍暴力嫌いな絵美奈が、親友がいじめられているって知ったらどうする？」

「え？」

「あたしはいじめられてんの。絵美奈が心配するからあたしは言ってないんだよ。
そっちこそ、何も知らないくせに！！生意気いってんじゃねえよ！！！」

いつのまにか、あたしも我慢の限界に達して――――キレていた。

「絵美奈は・・・・あたしを信じてくれないんだね？誰から聞いたかしらないけど、親友を一番に信じられない人、あたしは親友だとは思わない！！！」

「愛華だって！！！！あたしを信じてくれないの？これはあたしが一番信頼している人から聞いたんだから、間違いはないわよ！！！」

「誰から聞いたのよ！」

「彰吾よ！！！！！」

「え！？」

ちなみに、絵美奈と彰吾はいつの間にか付き合っている。この正反対の二人がどうやっって両思いになったのかは知らないけど。

いっておくけど、絵美奈は彰吾があたしをいじめていることは知らない。

「彰吾なんて、信じるほうが悪い！！！あたしを酷い目に合わせて

いる奴を信じるあんたの頭がおかしいわよ！！！！」

「愛華？いって良いことと悪いことがあるわよね？」

そのときに気づいた。

あたし、絵美奈をＭＡＸハイパーな怒りの頂点に追い詰めちゃった

ぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！

「愛華がそんなこと言うなんて、信じらんない！！！！もう、愛華のこと信じない！！

もう、永遠の絶交を誓うわ！！！」

そういうと、絵美奈は回れ右して帰っていった。

どうしよう・・・・・・・・！

絵美奈が怒ると一年は直らないといわれているほど気難しいもん！！！！！

おまけに、今あたしの周りには絵美奈以外の誰も友達がいない！！

あたしは・・・・・・・・・

あたしは、独りぼっちだ。

第五話・私は独りぼっち・後編（後書き）

愛華は絵美奈と永遠絶交してしまいましたね。

このあと、どうなる！？

（というより、どーしましょー？）

第六話・助けて～絵美奈からのＳＯＳ～・前編

こんにちは。絵美奈です。

愛華と絶交しました。

でもこれホントは、彰吾が絶交しろっていったんです。

「愛華って女とかかわらないほうが良いと思うよ、絶交したら？」

って。

でも愛華は、

「あたしは彰吾にいじめられてんの！！」

って言いました。

どっちがホントなのか、今から確かめにいきます。

あ、彰吾がいました。

「彰吾～！！！」

「おお、絵美奈か」

「ねー彰吾、さっき愛華と絶交してきた」

「そっか、そっちのほうがいいと思うよ」

「でも、絶交って言ったら、愛華、［あたしは彰吾にいじめられてるんだ］っていったの。」

その言葉を聞いたとたんに彰吾の顔色が変わったのを、私は見逃しませんでした。

さらに追い討ちをかけるべく、次の言葉を発射しました。

「ねえ彰吾、彰吾はいじめなんかしないよね、そうだよね？」

「う・・・・・・・・・・・・」

彰吾は黙り込んでしまいました。

「やっぱり彰吾じゃないかぁ。誰が愛華をいじめてるのかな？いつかそいつをとっ捕まえてやる！！！」

その瞬間、彰吾が口を開きました。

「・・・・・・・・・だよ」

「え？」

「そうだよ、俺があいつをいじめてるのさ！しかし、ばれちまったならしゃーねえな。消す」

「え、しょ、彰吾？！・・・・・・・・もがっ！！！！」

突然鼻につんと来るにおいがした。彰吾がなんかハンカチみたいなので私の口と鼻をふさいでるのが見えた。

私はとっさに、持っていた携帯に登録してある、愛華のメルアドを呼び出した。

すばやくメール作成画面を出して、ある三文字を打ち込んだ。

———さっき絶交しちゃったけど、まだ親友でいてくれる———？

その思いを込めて、発信ボタンを押した。

でもそれが限界だった。

私は床に崩れ落ちた・・・・・・。

「絵美奈・・・・・・！？」

こんにちは。愛華です。

今、なんか絵美奈の身に異変が起きたかもしれません。

あたしたちは、どちらかの身にピンチがおきるとすぐに、なんとなくだけど分かることができます。

そして今、異変を感じました。

「絵美奈・・・・・・・！！！」

あたしは数分前に絶交されたのも忘れて、走っていきました。

どこにいるかは分かりません。でも親友に何か起きたなら、それを救わない親友はいません！

――――――チャラランラン　ラッララランラン♪――――――――

「だれから？絵美奈からだ！！」

絵美奈からメールです。開いてみると・・・・・・

発信者：絵美奈

無題

本文

ＳＯＳ

「ＳＯＳって・・・・・・・・・絵美奈が危ない！！！！」

気がつけば、あたしはもう、無我夢中になって町内中を走っていました。

第六話・助けて～絵美奈からのＳＯＳ～・前編（後書き）

後編へ、続きます。

第七話・助けて～絵美奈からのＳＯＳ～・後編

「絵美奈ッ！！どこぉ！！」

こんにちは、愛華です！！

絵美奈からのＳＯＳです！

今すぐ出動します！！

といっても、絵美奈がどこにいるかわかんなきゃ、出動しようがないんですけれど・・・・・

「目が覚めたか」

ここは・・・・どこだろう？

私は絵美奈、親友の愛華と絶交して彰吾とはなしてたら、急に麻酔かがされてとっさにまなかにＳＯＳ打って・・・・・・

あっそっか、私さらわれたんだった。

「彰吾、ここはどこなの？」

「ここか？お前の良く知ってるとこ、学校の倉庫の隠し戸の中さ。ここならばれる心配がないし、安心してお前を殺ヤれるしな」

殺る・・・・？

私殺される！

ご冗談を！！

私まだやりたいことがあるんだよ！こんなとこでやられてたまるかぁぁぁ！！

でもどーしよーかな、唯一の手段の携帯は・・・・・・あれ？

私の愛しの携帯クン、いまだに私の手の中に。

私の袖近くに隠れてたから、彰吾が気づかずに取り上げなかったみたい。

ザマーミロ。

とりあえずメールッと。

「ピポパポ、ピポポポ」

「・・・・！お前、何してんだ！！くそっ、今日に限ってケータイ持ってたか。見逃した」

しまった！私のケータイ、プッシュ音機能オンだった！！

急げ、私！早くしないと私の命がどっかに消える！！

「てめぇ、チビなのに、生意気なことしやがって」

急げ、私！！

「俺としても、一刻も早く消したいしな。それじゃ、やるかな」

終わった！送信ボタン、送信ボタン押さなきゃ・・・・・！！！！

「絵美奈、バイバイ」

彰吾がナイフを振りかざした。

『送信しました』の文字が浮かんだ瞬間、隠れ部屋の中が紅く染まった。

「ピロリロリン♪」

あ、メールだ。

愛華です。メールです。差出人は・・・・・。

「えみなっ！！！！」

そう、あの絵美奈でした。

内容、内容は・・・・・

差出人：絵美奈

無題

愛華私は学校の倉庫の隠れ戸の中にいるだから早く助けに来て

「言われなくてもいくよ、あたしの親友さん？」

そうつぶやくと、あたしは猛スピードで学校までダッシュしていた。

「・・・・っ」

「大丈夫でしたか？絵美奈さん？」

気がつくと、私―――絵美奈の身体には、傷も何もなかった。

かわりに、私のとなりに男の人が一人と、その隣に足を撃たれた彰吾。

「貴方は？」

「わたしは彰吾（このバカ）の兄です。私の弟がご迷惑をおかけしました。」

「いえ・・・・・彰吾は？」

「こいつなら、大丈夫です。かなり足にダメージを与えましたが、死にはしませんよ」

「そうですか・・・・。」

私は助かったんだ！良かったぁ・・・・

「絵美奈！！！！！」

「愛華ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

数時間前に会った親友の姿に感動して、思わず抱きつく私。

「絵美奈、無事でよかったよぉぉぉぉぉっぉぉぉ！！！！！！」

「愛華もねぇぇぇぇぇぇ！！！」

あたしたちはそのまま、もううれし泣きするばかりだった。

第七話・助けて～絵美奈からのＳＯＳ～・後編（後書き）

彰吾大暴れ編はいったんおしまいです。

ちなみに今日は、できれば今書いてる四つの小説全部を次話投稿できればいいなと思ってます。

六日間の埋め合わせです。

第八話・交通事故・・・・・未遂！？

――――兄さん、大丈夫ですか？

――――ああ、大丈夫だ嬰汰（えいた）。俺はまだ負けちゃいない。それに、”あの作戦”もあるんだ。

――――でも、その足じゃ――――銃で撃たれたその足じゃ、勝ち目無いですよ！？

――――勝ってみせるさ。でないと俺は、兄貴に貢献できない。だから――――

――――――上月愛華を――あの憎き暴力少女を――――俺の手で――――――。

〜〜

†††☆†††〜〜

「ガバッッッッ！！！！！」

「はぁはぁ・・・・・・嫌なゆめみたぁ・・・・・・」

おはようございます、愛華です。

あの彰吾が大暴れした日から、悪い夢&寝汗で飛び起きる毎日が続いて、ノイローゼ状態になりかけてます。

夢の内容はいつも同じ。それが毎日続いてたら、ノイローゼ状態にもなりますね。

さて学校、学校――――――。

「おはようー愛華っ！！」

「ああ、おはよう絵美奈ぁ。ふあ～お」

「眠そうだね、愛華。どしたの？」

「ん、ここんとこ眠れなくてさあ、ノイローゼになりかけてんの」

「そりゃ大変だね～」

こんなたわいもない会話をしながら、私たちはいつものように通学路を歩いていく。

このあと、あの”運命の人”と出会うなんて、思いもせずに――――

「ねえ、絵美奈、今日の放課後あいてる？」

「もう帰りの話？うん、いーけど・・・・・きゃ、愛華、前、まえ――――！！！！」

絵美奈が叫ぶような声で言った。それに反応して、私も前を向く。

とー――――！！！

「え、前？前って――――――きゃああ！！」

前には――――一台のトラック。ちょうどあたしの目の前に。避けようとしても、もう間に合わなくて――――！！！

「きゃ、きゃぁぁぁっぁぁぁぁぁ！！！！――――――――ふえ？」

「愛華、あぶないっ！！！――――――って、え？」

轢かれると思ったあたしの身体は、血まみれにもなってないし、無論痛みもない。

変わっているのは、トラックの前に立ちふさがった男の人がいることだけ――――。

「あ、あの・・・・・だいじょぶですかぁ！？」

あたしがそう声をかけると、その人――――その男の子は起き上がって微笑んだ。

「うん、大丈夫だよ」

そう優しく言いながら。

あたしはその優しそうな微笑みに、なぜかすごく惹かれてしまって。

「あ、ありがとうございまっす！！」

なぜかすごく緊張してしまって。

「うん、いいのいいの。だからキミ――――愛華さんは早く学校に行きなさい。五年生だから、遅刻しちゃまずいでしょ？それに、親友の絵美奈さんも巻き込んでしまうから」

「は、はい・・・・・」

「じゃ、そろそろ行かなきゃ。ほらいくよ、愛華っ！！！」

「え、あ、うん！！」

「いってらっしゃい。上月愛華さんと清水絵美奈さん。彰吾にいじめられないようにね」

「「は、はい・・・・！！」」

私と絵美奈はそのまま走り出した。が、あることを不審に思って、絵美奈に話してみた。

「ねえ、絵美奈？何であの人、私たちのこと、知ってたんだろうね？」

「彰吾のことも知ってたから、たぶん彰吾のお兄さんだよ」

絵美奈はそんな事興味がないらしかった。でも絵美奈の推測は間違っている。なぜなら――

（あの人、彰吾のお兄さんなんかじゃない。だって、絵美奈がさらわれたときに来て、助けてくれたお兄さんは、あの人じゃないもん。じゃ、誰――――？）

私はそんな妖しい雰囲気にも、なぜか強く惹かれたのだった。

――――ふふふ、あの女の子が上月愛華か。なかなかじゃないか――

――――兄貴、何をするおつもりですか？あいつぐらいなら俺でも――

――――僕に楽しませてくれないか？あの子は気に入ったしね。さすが元苛められっ子だ。楽しみがいがあるよ――

『兄貴』と呼ばれた男は、これから何か起こしそうな、『妖しい』雰囲気を秘めた男らしかった。

第八話・交通事故・・・・・未遂!?（後書き）

この妖しい男は、誰でしょうか？

次話まで想像をふくらませてお待ちください。

第九話・誰？（前書き）

後書きにお知らせがございます。

ご覧ください。

第九話・誰？

「むむ～」

こんちは。愛華でっす。

今日は休日なので、部屋でごろんごろんしております。

「あの男の人～誰なんだろ～気になる気になる～」

そう、昨日会った男の人が気になって、ごろんごろんしているのです。

「うー、誰なんだろー。彰吾兄じゃない事は確かなんだけどなーごろごろ」

ごろんごろんごろんごろんごろんごろんごろんごろんごろんごろん！！

「気になる～！！」

もう気になって仕方ありません。こうなったら！！

「思い立ったが吉日！！」

ちょっと意味は違うけど、私は家から飛び出して、彰吾家に向かいました。

「てめえなんぞに用はない」

プツッ。

彰吾の家に着き、インターホンを鳴らしました。そこまでは良かったのですが・・・・・

「もしもし、上月愛華と申しますが」

「テメーなんかにゃ用はねえよ。さっさと失せろ」

といわれ、追い出されてしまいました。

そして、結局は家に逆戻り。

「くっそぉぉお！！」

そして、今はまたベットの上。

また彰吾の家に行っても、また追い返されそうですし、ここでのんびり過ごすとしましょう。

絵美奈と遊ぶ計画も、ないしね。

しばらくはこんな日常、続きそうです。

でもこれでハッキリした。

あの人は、彰吾のお兄さんじゃないということ。

かといって、あたしが知ってるような人でもない。

あなたは一体、誰？

――――兄貴、上月愛華を助けたって、ほんとか？

――――ああ、本当だよ。大切な遊び相手を、逃すわけにはいかないからね。

――――でも、あのままにしておけば――――

――――心配要らない。遊んだあとは、きちんと葬るからね。

――――葬るって、墓場に？

――――墓場というと、そうだろうね。

――――“絶望”という名の、墓場に――――

第九話・誰？（後書き）

誠に申し訳ございません。

学業が忙しくなってまいりました。

このままでは、小説の更新が危ういところです。

なので、作者が現在書いている四作品すべてを、少しの間休載ということにしたいと思います。

勝手ではございますが、一～二週したら復帰いたします。

ご了承ください。

第十話・詩の著者は

――――――パワフルにパワフルに勝ち抜いて

――――――クールにクールに生き抜いて

――――――変わりたいならさあおいで

――――――きっと貴方は変われるよ

――――――鋭い目をした暴力少女に――――――

パタン。

「こんな詩も・・・・あったんだ・・・・・」

あたし愛華は、そういってため息をつきました。

今は読書の時間。

あたしはたまたま見つけたこの『こころのなかの詩(うた)』という本に載っている詩を、読んでいるところです。

「でも・・・」

あたしはまた本に目を落としました。

「こんな詩、初めて・・・・」

そう。

この詩のタイトルは、『暴力少女』と言うもの。あたしは、そのタイトルにも驚きましたが・・・・

この詩の内容。

まるで、あたしみたい。

いや、華麗じゃないんだけどね。

全部を読んでみると――――――

“暴力少女　kai　Minezaki

暗黒の森にて　少女が目覚めた

冷酷な目をした　華麗（ビューティフォーガール）なる少女

その子は　昔いじめられてた　心の傷を受けた

昔のことは　心の奥に閉じ込めて　新しい未来に目を向けよう

彼女を苦しめた奴等に　復讐を誓いながら

パワフルにパワフルに勝ち抜いて

クールにクールに生き抜いて
変わりたいならさあおいで
冷たい目をした暴力少女に
あなたもきっとなれるはずだよ
誰よりも強く
誰よりも冷酷(クール)で
誰よりも空(むなし)しい
独りぼっちの　暴力少女に
”

空しくて　冷酷で　強い
そんな少女になりたいならば
おいでなさい　私の元へ

こんな内容かな、まとめると。

「あれ・・・愛華ちゃん？」

「うへぇ！？・・・ああ、あの時の！！」

「驚かしちゃったかな」

そう・・・あの、トラックに轢かれそうになったあたしを助けてくれた、身元不明の男の人だった。

「あ、その詩、僕も気に入ってるんだ。なんか現実感（リアリティ）あるよね」」

「はい！・・・・・あ、そだ」

「ん？」

あたしは、一番気になっていたことを、聞いてみることに。

「あなたの・・・名前は？」

すると、その人はにっこり笑いながら、こう答えた。

「嶺崎カイ（みねざきカイ）。僕は、嶺崎カイさ」

「みねざき・・・・カイ？」

どこかで聞いたことがある名前。なんだろう・・・・・

嶺崎カイ。

この名前は、愛華が「聞いたことがある」といった名前だ。

しかしそれは、正しい表現ではない。

正確には、「見たことがある」又は「目にしたことがある」だ。

だって。

その名前は。

「暴力少女」という詩の、著者の名なのだから。

ｋａｉ　Ｍｉｎｅｚａｋｉとなっていても、愛華の目は見逃さなかったようだった。

第十話・詩の著者は（後書き）

休載解除です！

まあこれからは超ゆっくり更新ですが笑

第十一話・「兄貴」

「峰崎……カイ……」

こんにちは、愛華です。
今、自分の部屋のベッドにねっころがって、「峰崎カイ」さんのことを考えていたんですが・・・

「あの人、一体何者なんだろうか・・・」

あの人のことはすべて謎。全身が謎のヴェールに包まれてるんです。
あの人について分かってることは、

・名前
・容姿（まぁ、当然だが）
・彰吾の兄ではない。
・自分がいるところには、いることが多い。

これだけしかないのです。
でも、気になることが。
四番目の、「自分がいるところには、いることが多い」ということ。
ストーカー・・・なわけないですよね。じゃぁ、何だろう……？

「本人に聞いてみるしかないかな・・・」

でも、あの人はどこにいるのだろうか？

「う～ん……」

謎は尽きません。

「彰吾！嬰汰！」

「「兄貴！？どうしたんですか？」」

「ん、愛華ちゃんをこれからどうしようかなーと、こうして遥々ここまで来たわけ」

「遠いところからご苦労様ですね、兄貴。え、上月愛華を……？で、どうするおつもりで？」

「まだ考え中ー」

「……兄貴ぃ」

「……兄貴は意地悪ですねー。ドSでしょ」

「愛華ちゃんをいじめてた彰吾に比べちゃ、まだいいほうでしょ」

「……う」

「ぁ、ちょっと一人にしてくれるかな。ちょっと考え事したいから」

「あ、分かりました。兄貴」

この「兄貴」と呼ばれる人物は何者なのか？
そして、愛華は一体どうなるのか？
まだ、この結末は誰にもわからない。

わかるとすれば、ただ一人。

「上月愛華……さて、まず如何しようかな……？」

愛華に何かを起こそうとしている、張本人だけだった。

第十一話・「兄貴」（後書き）

そろそろ、完結かな？
あと二～四話ですね、きっと。

第十二話・黒ずくめの男

こんにちわ、愛華です。
今は、クラブ活動中。私は絵美奈と同じ「バトンクラブ」です。
「絵美奈、クラブ活動ってあんまりやったこと無いよね」
「そうだよね、五年になって何ヶ月か経つのに、これが初めてだよね」
そんなことを言いながら練習していたら、注意されました。
「ちょっと、そこの五年！喋りながらやってたら怪我するよ！」
「怪我なんかしませんよ……痛っ！？」
ほんとに怪我しちゃったみたいです…。
「愛華、大丈夫！？」
「うん、大丈夫。ちょっと手首ひねったみたい」
実はちょっとじゃないけど、心配かけないようにあえてこう言いました。
「ならいいけど。無理しないでね、ちょっと休んでなよ」
「ぁ…うん。ありがと」

「ちょっと」って言っちゃったけど、本当は痛いんですよね……

「ではこれで練習終わりー！みんな帰っていいよ！」

「「「はーい！」」」

さて放課後。私は絵美奈と一緒に帰宅中。

「絵美奈、明日遊べる？」

「うん、遊べるよん♪どこで遊ぼうか？」

今日の放課後から明日の話です。
気が早いなんていわないで下さいよ？

「どこで遊ぼうか？」

「そうだね――――」

その時、絵美奈の後ろから自転車で男の人が近づいてきました。
全身黒尽くめで、私たちの後をぴったりくっついてきます。

でも絵美奈は気づいていないみたいで――――

「ほんじゃね、愛華！」

といって、元気に別れを告げて去っていきました。
そして、黒ずくめの男の人は、絵美奈のほうにぴったりくっついていきました。

それが彼女との、少しの間のお別れとも、まったく知らずに……
――――――。

次の日。

「清水がさらわれた」

先生からそのことを聞いた私は、愕然としました。

やっぱりあの黒ずくめの人は怪しい人だった！
絵美奈の近くにいたのに守れなかった！
じゃぁあの人は、一体、誰……

「あと、上月にメモが届いている。お母さんからだそうだ」

お母さん？私は首をかしげました。
お母さんなはずがないから。

しかし、そのメモを見たとき。
私はもう、上月愛華ではありませんでした。
ただそこには。

瞳に冷たい炎を宿す、暴力少女の姿しかありませんでした。

――――――上月愛華、いや、暴力少女へ

清水絵美奈は死の運命にある。

お前が闇雲に助けに来れば、清水絵美奈の命は無いモノと思え。

ただし。

この文面を書いた者を見つけ、戦って勝てば、清水絵美奈は無事にかえそう。

負けた場合、お前の命も清水絵美奈の命も無い――――――

第十三話・図書室で（前書き）

このお話から最終話までは、第三者視点で物語を進めます。

第十三話・図書室で

「……許せない」

愛華は今、教室の真ん中に仁王立ちし、怒りでわなわなと震えていた。

「おい上月、どうした？」

先生が不審に思って声をかけてくる。それを愛華は無視して、

「先生、今日早退します」

それだけ言うと、愛華は鞄を持った。

「お、おい、上月！理由があるなら言いなさい！勝手な早退は許可しないぞ！」

先生がそう怒鳴るような声で言う。すると愛華は

「なら、許可させるだけですが」

それだけ言うと、近くにあった誰かの机を先生に向かって投げた。

いや、放った。

それは、恐ろしく速い速度で先生の体に直撃し、

「ぐ……はぁ！？」

先生は呻いて倒れた。

クラス中が愛華に注目する中、

「じゃ、早退します♪」

口調は可愛いが表情は冷酷に、去っていった。

唖然とする生徒と、気絶した先生をその場に遺して。

愛華には、この犯人の見当がだいたいはついていた。
なぜなら、愛華がいる場所にはよくいる「あの人」なら、愛華の近辺の事だって探りを入れることは出来たからだ。

だからこそ怒っていた。
だからこそ許せなかった。

自分を騙し、嘲笑ったあの妖しいあの人が。
そして。
心の内はとても醜かったあの人が。

愛華はもう、いつもの気弱な女子小学生ではなかった。

瞳に冷酷な光と強い意思を宿し。
口にはうっすらと微笑さえ浮かべている。

もう誰も止められない、暴力少女と化していた。

「……ここにいた」

愛華はその、目的の人物を見つけた。

「その人」は、図書室にいた。窓際の机に腰掛け、外を見つめていた。

「おや、早かったね。もう少し遅いと思ったけれど」

「その人」は、そういうとゆっくりとこちらを振り向いた。

「愛華ちゃん……いや、暴力少女さん」

「峰崎……カイ。絵美奈をかえして」

愛華がそういうと、カイは愛華をまっすぐ見つめ、こういった。

「おや、たった三、四回しか会ってないのに、呼び捨てとは酷いなぁ。それに、書いたはずだよ。『闇雲に助けに来たら、清水絵美奈の命は無いモノと思え』と」

「ああ。書いてあったわね。でも、闇雲に助けに来たわけじゃないのよ？あんたと、戦に来たわけ」

「いい覚悟だね、愛華ちゃん……いや、暴力少女。だが、ここでは狭すぎる」

そう言うと、カイは不敵に笑った。
まるで、愛華を試そうとするように。
そして愛華も、冷酷に笑った。
まるで、自分が負けることが無いかのように。
「さ、早く図書室から出てくれ」
「え？」
愛華は少し不審に思ったが、素直に従うことにした。

「愛華……！！」
図書室の貸し出しカウンターの奥に縛られて、本に埋もれた人影は、その様子をしっかりと見ていた。
それを知っているカイは、愛華が図書室から出た後、絵美奈の瞳をまっすぐ見て、言った。
「君は僕の妹の『峰崎惣実』で、君には親友なんていない」
そう、二、三回いい続けると、絵美奈の目つきがトロンとして来た。
「さ、惣実。僕と一緒に悪いやつを助けに行こうか」
「はい、お兄ちゃん」
彼女は完全に、洗脳されてしまった。

最終話・暴力少女・前編～戦・絵美奈の運命～（前書き）

この話は結構グロイ。
あ、最初のほうだけですが。

最終話・暴力少女・前編～戦・絵美奈の運命～

「ここ……体育館？」

愛華は、カイに体育館に連れて来られていた。

「うん、ここが一番手っ取り早いしね」

「こんなとこで派手になんかやると、危険よ？」

「大丈夫、鍵掛けておいた。ついでに、その鍵は窓の外」

「……そうすると、あんたもあたしもここから出られないってわけね。邪魔される可能性も無いわ」

「ふふ、僕は逃げる必要なんて無いけどね……」

「上等じゃない」

体育館の真ん中で、不敵に笑う男と子供。

でもその笑みは、冷酷で、氷よりも冷たかった。

「では……始めるとしますか」

「ええ。……そちらからどうぞ」

――――ブスッ！

音がした。その音がしたほうを見ると……

「斬れて、る？」

そう、音がした左肩から、血が流れていた。
その量は、決して少なくは無い量だ。

――――こいつ…強い…――――

「どうした？」

愛華よりも少し後方で笑うカイ。

「こんなことで固まっていちゃ先が思いやられ…」

グサッ

「う！？」

愛華はカイが油断して喋っているその隙に、自分の左肩を斬ったと思われるカッターを投げた。そのカッターはカイの右肩に直撃。

「なかなか……やるじゃないか」

「そっちこそ」

ヒュン、と言う音とともに、回し蹴りが放たれる。しかし愛華が放った回し蹴りはカイには当たらず、カイの回し蹴りをよけるためカイの肩を足場に上に飛び上がる。

飛び上がった愛華はくるりと一回転し、足を天井に向ける。そしてその足で天井を蹴り上げ、カイを上から攻撃する。

もともとジャンプ力だけは強力な彼女にも少々きついが、この学校の体育館は並にくらべ天井が低い。そしてカイの身長はとても高い。それが幸いし、こんな作業は楽々こなせる。

カイは上からの攻撃を気づいていたのか、上からふってきた愛華を両手で受け止め、そのまま床に突き落とす。
愛華も男の力には敵わず、ジタバタしてみたものの、無駄だった。

「う……」

呻いて起き上がろうとしても、カイは離してくれない。
こうなったら……

「はうっ！！」

自分で頭を床にぶつけ、それの反動で起き上がる。しかしその力もけっこう弱く、起き上がることは出来たものの、立つことは出来なかった。

でも起き上がったことでカイが反動で飛ばされる。
外からの力がなくなったことで愛華は立つことが出来た。

「ほぁっ！！」

少し上に飛び上がり、飛ばされたカイをまた上から攻撃する。

「あがっ……」

愛華のとび蹴りはカイの腹に直撃。カイは呻いてまた飛ばされる。しかしカイも負けてはいなかった。飛んできた愛華の足を掴み、そのまま投げ飛ばす。

「きゃぁぁ！！」

悲鳴を上げ壁に激突。

「いたたたた……カイ、なかなかやるわね……」

「そっちこそ……でもね」

攻撃体制を整えた二人は、ほとんど同時に言った。

「本番は、これからだ」

「本番は、これからよ！」

そう言って、床を蹴った。

二人の体が舞う。その体が愛華とぶつかりそうという寸前で、カイが愛華に言った。

「お楽しみも、これからだよ……！」

最終話・暴力少女・前編～戦・絵美奈の運命～（後書き）

次話、本当の意味での最終話。

絵美奈はどうなる？

最終話・暴力少女・後編～戦・空しき暴力少女～（前書き）

少しグロイです。

最終話・暴力少女・後編～戦・空しき暴力少女～

「お楽しみも、これからだよ……！」

カイがそういった瞬間、二人は天井にぶつかる。しかし床を蹴った力が相当だったため、天井を破り、屋根の上に出てしまった。無論、屋根を破ったため頭をぶつけてしまったが。

「暴力少女、君は友達を助けようとしているようだが……なぜかい？」

「決まってるでしょ、親友だからよ！」

愛華がそういうと、カイは瞳に不思議な光を宿した。

「その親友は、僕によって洗脳されている。『愛華という親友なんかいない。君は僕の妹だ』とね」

なんというロリコン精神！

「絵美奈は洗脳されるはずがない！あの子は人一倍気が強い子よ！」

「気が強いのと洗脳はわけが違う。信じられないようなら……証拠を見せようか。惣実、おいで」

「はい、お兄ちゃん」

聞きなれた声。この声は……絵美奈。

「え？」

そして図書室の窓を突き破って出てきたのは、絵美奈その人。

「お兄ちゃん、この人が悪い人？」

幼い子供のような口調で聞く絵美奈。彼女はもう、絵美奈であって絵美奈ではない。

「ああ、そうだよ。お兄ちゃんを困らせているとっても悪い人」

「じゃぁ、殺すね！」

「じゃあね！」というような話し方で言われた死刑宣告。

「え……絵美奈？」

「惣実、戦う」

そういった絵美奈はもう絵美奈ではない。

目つきは鋭く、冷酷な光を宿している。

口には微笑を浮かべている。

まるで、二人目の暴力少女だった。

「がっ……！？」

気づいたときには空中に浮いていた。

それは絵美奈――――惣実が、さっき突き破った天井の穴に向かって、愛華を突き落としたからだ。

「きゃ、きゃぁぁぁぁ！！」

天井は低いといっても、結構な高さはある。まして下にはマットなんかない。

死ぬ確率のほうが高い。

「あ、がぁぁぁ！！」

絶叫。床に強くたたきつけられた愛華を、さらに惣実とカイがクッションにし、床に到達する。

新たな体重がかかり、愛華はついに意識を失った。

意識を失う直前、カイが言った。

「君はもう、永遠の暴力少女だ」

目が覚めたとき、病院だった。

「上月さん、大丈夫ですか？」

看護婦さんが声をかけてくれた。

しかし愛華は無言で首を縦に振る。

「なにかあったら、気軽に声をかけてくださいね」

優しく声をかけてくれるが、やはり無言だ。

ただ何か、体に違和感を感じる。

傷つけたい。

ただなにかを傷つけたい。殺したい。暴力を振るいたい。

「うらぁ！！！」

看護婦さんを殴る、蹴る。

「上月さん！？上月さん！？どうしたんですか！？上月さん！？」

愛華は取り囲まれる。しかし、その人たちをすべて蹴散らし、入院患者をも襲おうというギリギリの所で取り押さえられた。

愛華は完全に、暴力少女と化していた。

もう永遠に暴発し続ける。

『誰よりも強く』

「うがぁぁぁ！離して！上月さん！離してください！…ぁがっ！！」

「ぁあ！？うがぁぁぁぁ……」

『誰よりも冷酷（クール）で』

「ねえ、ここから出しなさい！」

「駄目だ！上月さんは暴発する！あぁっ！？」

『誰よりも空しい　独りぼっちの　暴力少女に』

終わり

最終話・暴力少女・後編～戦・空しき暴力少女～（後書き）

その後、惣実とカイの行方を知るものはいません……

いままで愛読ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0681f/

暴力少女～ファイティングガール～

2010年10月13日06時29分発行